

# 体育会学生の大学生活・就職活動 支援のあり方



- 安田和広 ●中京大学スポーツ振興室課長  
大山賢一 ●法政大学キャリアセンター市ヶ谷事務課長  
土屋明生 ●関西学院大学キャリアセンター長  
山崎秀人 ●㈱アスリートプランニング代表取締役社長  
(司会)  
小林伸生 ●関西学院大学経済学部教授  
本連盟広報・情報部門会議(大学時報)委員

——敬称略——

## 選手としてのピーク時と就職活動の重複 体育会学生を取り巻く就職環境の現状

小林 体育会でスポーツに打ち込んだ学生は就職活動でも優位に立つ、というのがこれまでの一般的な評価でした。事実、体育会に所属した学生は組織に対する貢献意識が高く、日々の努力も欠かさないため、企業もそうした有為な資質を高く評価したうえで多くの体育会学生を採用し、時間をかけて育て上げてきました。そしてそれが、体育会学生が大学生活においてクラブ活動に打ち込む一つの誘因となってきました。

ところが、近年はそうした状況に変化が生じてきています。その要因の一つは、企業における採用や人材育成に対する考え方の変化であり、時間をかけて社員を育てるという考え方から、採用時点で即戦力になりうる人材を求める傾向が強くなっています。エントリーの段階で、一定の英語力があることを条件とする企業が増えているのは、その一例と言えます。

さらに大学側も、教育の質保証の重視に伴い、成績評価の厳格化を進めています。



(2013年2月22日 私大連盟会議室にて)

事実、四年間で卒業が困難な体育会学生も増加しています。

また、就職活動の動き自体も変わってきており、長期化が一般化することで、選手としてのピーク時と就職活動の時期が重複する事態も珍しくなくなりました。

本日の座談会では、学生時代はアスリートとして活躍し、現在も学内のクラブ活動の指導、あるいは就職支援などに関わられている方々をお招きしました。大学としての就職活動支援はもとより、勉学とクラブ活動をいかに両立させて社会に有為な存在として送り出していくか、そのための支援はどうあるべきかについて、幅広くご議論をいただければと思います。

それではまず、近年の体育会学生の就職環境にどのような変化が起きているのか、皆さんが感じになっていることを率直にお話してください。

### 時代は変わっても 優秀な体育会学生のニーズは高い

山崎 私は、一九九一年に体育会学生に特化した就職ナビ、イベント、新卒紹介な

どの企業を設立し、スポーツ系学生のための就職支援に携わっております。

この二十年余りの間、企業の考え方や動向に応じて、体育会学生の就職状況も確実に変化してきています。

体育会学生が最ももてはやされたのはバブル時代です。表向きには、体育会学生に対する過度の優遇が就職差別にあたるものと考えがあったものの、水面下では、各企業とも体育会学生を大量に採用していました。

ところがバブル経済が崩壊すると、一転して就職氷河期に突入しました。とはいえ、それで体育会学生の人気がぐっと下がったかという点、そんなことはありません。体育会学生は学生全体の一角に満たない人数ですが、人気大手企業では、全採用人数の二、三割を今でも体育会学生が占めています。時代は変わろうとも、体育会学生に対する一定のニーズはあるのです。

その背景には、四年間、厳しい環境の中で鍛錬し、そして先輩後輩の上下関係のあり方を学んできた点を高く評価しているのだと思います。企業はチームで動きまわし、特に日本企業は組織への帰属意識を重

視します。体育会学生が身につけた、組織の中で活躍できる素地、資質はとても魅力的に映っていると感じます。

また、体育会学生は心身ともにタフであり、コミュニケーション能力も高いという点も見逃せません。これは、グローバル社会の中で最も求められる資質です。

総合商社の人事担当者などに聞いてみても、皆さん様にコミュニケーション能力を重視しているとお答えになります。しかし、それが単なる語学力、英語力を意味するかというと、そうではありません。異言語、異文化を乗り越えて意思疎通を図れる学生を採用したがついてきます。こうした気質をもち合わせているのが、体育会学生というわけです。

もはや気合いと根性だけでは採用されない時代に入ったことは事実ですが、以前にも増して、優秀な体育会学生を採用したいというニーズは大きくなっていくように感じています。

**土屋** 最近の就職環境ということで言えば、体育会学生も一般の学生と同様に、就職活動の早期化・長期化の影響を受けてい

るのは確かですね。練習や試合で忙しいレギュラー選手たちは、就職活動がしにくい状況にあり、関西学院大学でもレギュラーではない部員から内定が決まっていくという傾向が見られます。

そうした事情はあるものの、本学を例にとると、体育会学生が就職に強いことは明らかです。

昨年の体育会学生の就職決定率（就職決定者÷就職希望者）は九九・五％、就職率（就職決定者÷自営）÷（卒業者－進学決定者）は、九一・五％と驚くほど高い割合で就職が決まっています。

学生全体の就職率が八二・八％ですから、いかに体育会学生の人気が高いかがわかります。

### 社会人と接する機会を増やすことで 体育会学生に働くイメージを伝える

**大山** 確かに、体育会学生に対する企業

側のニーズは高いと思います。しかし、彼らの就職活動をつぶさに見ていくと、少々準備不足な面が否めないと感じざるを得ず、特に就職活動に対する意識は、決して高い

とは言えません。

法政大学キャリアセンターでは、毎年秋口から就職に関する行事やイベントを数多く開催していますが、その時点での体育会学生の参加者は非常に少ないのが現状です。年が明けた二月になると連日、三年生を中心に二百人ほどの学生がひっきりなしに個別相談を受けに訪れるようになりますが、体育会学生の姿はあまり見受けません。その背景には、体育会学生は社会で働くイメージを頭の中に描きにくいという事情もあるように推測しています。

体育会学生の生活は、クラブ活動と勉強が中心です。日頃接する機会がある社会人といえは、監督、助監督やコーチ、そしてOB・OGなどになります。そうした方々との会話の内容は競技についての話題が中心になりますから、社会で働くとはどういうことなのかというイメージをもてずにいるように感じます。

本来ならば、実際に社会で働く人たちから、働くことの楽しさ、厳しさなどを耳にしたり、情報を取得したりすることが必要だと思のですが、その機会が圧倒的に不

足しています。

ですから、いざ就職活動をする時期になつても、ギアが入らないのです。どうしたらいいのだろうと戸惑っている体育会学生は少なくないと思います。

### 教員志望の学生には

#### 早い段階での意識づけが必要

**安田** 私も、体育会学生に対する企業のニーズは高いと感じています。中京大学の場合は、スポーツ科学部以外の一般的な学部の体育会学生の就職率（就職者数÷（卒業者数－進学者数））は九〇%を超えます。四年間の部活動で培われた人間性が評価されてのことだと思います。

一方、本学の体育会学生の八割以上はスポーツ科学部の学生で占められており、そのスポーツ科学部では、学生全体のうち七割以上が教員免許の取得を目指しています。しかし、アスリートとしてクラブ活動に専心しながら、教員免許を取得するのは並大抵のことではありません。したがって多くの学生が苦戦を強いられている現状があります。

教員を目指すならば、早いうちから準備をし、勉強にも打ち込む必要があるのですが、競技能力の高い選手ほど安穩と構えていて、必死に勉強をしていません。加えて、教育実習を終えるまでは就職活動も行わないという、いささか中途半端な学生が少なくありません。

こう言つては何ですが、四年生に進学する段階で、教職課程の単位が足りず、教育実習に行くことができない学生が、早々と就職を決めるなど、好結果を勝ち取ることがあります。早いうちに意識を切り替えたことが奏功しているわけです。

そこで私が重要であると感じるのは、教員志望の学生に対する意識づけです。本格的に教員を目指すのであれば、一・二年生のうちから計画を立て、しっかりと勉強していかねばなりません。少なくとも、教職課程が始まる二年生の段階で勉強をスタートしなければよい結果は得られません。われわれとしても、その厳しさを早い段階で伝えていこうと努めているところでです。

**小林** 教職課程を履修すると、多くの単位を取得する必要がありますから、クラブ

活動との両立は厳しい面がありますね。さらに少子化の影響で、教員の採用を抑える傾向もありますから、なおさら狭き門を突破しなければいけません。その現状を正しく伝え、意識を高めてもらうことが何より必要だと思えます。

ひととおりお話をうかがつて、就職問題に関しての厳しい面が現れている一方で、体育会学生は企業や社会から高い評価を得ているという感触を、皆さんもおもちのように見受けられました。

それではここで、あらためて体育会の良さ、そして企業から評価される秘訣について、ご自身のご経験なども踏まえながらお話しただけですでしょうか。

**土屋** クラブ活動にかぎらず、すべての課外活動に共通することだと思いますが、一つのことと真剣に打ち込めば、おのずと思考力や行動力が身につけてきます。

まず、成果を上げるために、どのような準備をし、ものごとを進めていくかを考える。そしてそれに基づいて行動する。すると、善し悪しにかかわらず結果が出てきます。その結果に応じて、今度はどう対応す

安田 和広氏



るか、また考えて行動に移す。それを日々繰り返すことで、自然とものごとを深く考え、行動する習慣が身についていくのです。

私は長らく硬式野球部の監督を務めました。私が、選手たちには「結果が出た瞬間から次の勝負が始まる」ということを繰り返して述べてきました。試合に勝利したときには、「今日一日は喜んでいいが、明日からは次の勝負に向けて気を引き締めなければいけない」、負けたときには、「なぜ負けたのかを考え、次の試合に臨みなさい」と説いてきました。

結果に応じて次の展開を考える癖をつけることが、個人の成長を促すとともに、チ

大山 賢一氏



ーム力を伸ばすことにつながるのです。

安田 土屋さんがおっしゃるのように、自ら状況を判断し、考えることができる学生は競技の世界でも明らかに伸びますし、企業からの評価も高いのは確かです。

指導者の指示に従う素直さも必要ですが、自分なりに懸命に思考を巡らす習慣がある学生は、実績を残す可能性が高いのです。唯々諾々と指導者の言うことに従う学生より、そういう学生のほうが進歩するんです。さらに、ものおじしない、強い精神力をもっているのも体育会学生ならではです。

誰もが初めて試合に出る際には、相手が強く、優れているように見えるものです。し

小林 伸生氏



かし実際に試合をしてみると、自分の力が通用することを理解し、自信をもつようになるのです。

特に、大学の体育会で活動する学生の多くは、そうしたハードルを幾度も乗り越えてきていますから、精神的に強い面をもっています。こうした学生は社会人になっても成長するように思いますね。

### 負け方を知っていることが 体育会学生ならではの強み

土屋 同時に、「負け方を知っている」ことが体育会学生の強みだと思います。社会に出たら、失敗することも、挫折するこ

ともあるでしょう。中には精神的に落ち込んですぐには立ち上がれない場合もありま  
す。しかし、体育会学生は、何度となく敗  
北を経験し、そのつど乗り越えてきていま  
す。どんなに優秀な選手やチームであつて  
も、勝ち続けることは容易ではありません  
からね。

抑えられないほどの悔しさを抱えなが  
ら、結果に対する責任を他人に押しつた  
りせずに、敗北を自ら受け止めるというこ  
とを何度か経験する中で、失敗や挫折を自  
ら消化する術も身につけているわけです。  
こうしたストレス耐性も、社会に出ていく  
うえで重要な要素ではないかと思えます。



土屋 明生氏

小林 確かに、社会に出ると結果を求め  
られますし、負けを突きつけられる場面が  
必ず生じますから、敗北の経験を通じた次  
の戦いへの準備の仕方、さらには失敗を次  
につなげる気持ちのコントロールの仕方な  
どのトレーニングを重ねてきていることの  
意義は大きいでしょうね。

### クラブのために力を尽くし

### 人間的な成長を遂げた学生が評価される

山崎 私も同意見です。大学のクラブ活  
動の特徴をひと言で言うと、「競争と共存」  
ということになると思います。

例えば、東京六大学クラスの野球部だと、



山崎 秀人氏

百人以上の部員がいます。その中で九人枠  
を目指して、仲間とのレギュラー争いが行  
われます。これは熾烈な競争です。

しかし、いざ選手が決定し、試合が行わ  
れる段階になると、あとは共存です。メン  
バー漏れた部員も含めて、チームのため  
に自分の役割を果たし、一体感をもって試  
合に臨んでいきます。

レギュラーになれなかった学生にとつて  
は、不本意なことに違いありません。しか  
し、こうした不本意なことに向き合う時間  
をもつことは、価値のある貴重な経験にな  
りますし、必ずや将来に生きると思いま  
す。意外に思われるかもしれませんが、企業  
はこうした経験をもつ学生を、非常に高く  
評価するのです。

体育会学生というと、主力選手ばかりに  
目が向けられがちですが、むしろ最近  
は、スポットライトを浴びる主力選手よりも、  
裏方として陰で選手たちを支える学生に人  
気が集まるようになってきています。プレ  
イヤーとして入部したにもかかわらず、ク  
ラブの事情でマネージャーになり、四年間や  
り抜いた。あるいは、学生時代に一度も公

式戦に出られなかったが、最後までがんばった。このように不遇な状態でも、いかに組織のために力を尽くし、人間的な成長を遂げているかが、一つの評価基準になっているのです。

**土屋** 私も硬式野球部の監督時代には、その点を重視してきました。プレイヤーとして活躍できない学生には、学生コーチやマネジャーの役割を与える。さらには、他大学の戦力分析に精を出してもらおう。このように、選手とは違う立場でチームの勝利のために能力を発揮してもらいます。これが、個々の部員のモチベーションアップにもつながりますし、チーム力の向上にも結びつくのです。

**山崎** 私も、そこにこそクラブ組織のよさがあるように思います。私が学生だった二十数年前には、クラブにもゼミにもサークルにも入っていない学生はほとんどいませんでした。必ず何らかの組織に所属していたものです。

しかし現在は、何ものにも束縛されたくないという風潮の中で、いかなる組織にも所属しない学生が増えています。

そのことを否定するつもりはありませんが、私は、組織の中で起こる挫折や他人との摩擦などを、むしろ必要不可欠のものととらえています。なぜならそれが人間形成の基だからです。だからこそ企業も、クラブ組織の中で培われた人間力を高く評価しているのです。

### 自分の役割を理解し貢献できる学生はアカデミックなリサーチ能力が高い

**小林** 組織の中で自分の役割はいったい何なのか。どのような手段で貢献するのかということを意識している学生は、学業面でも就職活動でも高いモチベーションをもつことができると思います。

土屋さんがおっしゃったように、選手から外れて競技の戦力分析などを行う学生の分析の鋭さは私も舌を巻くほどです。

自分の講義を受けてくれる体育会学生のレポートを読むと、アナリスト的な視点で、客観的かつ簡潔にまとめられた論文に出会うことがあります。それは特に、サポートスタッフとしてクラブに貢献している学生である場合が多いです。クラブ活動が確

実に学力に良い影響を与えている証しだと思いますね。

**安田** 最近、公園などで子どもたちが集団で遊ぶ光景が見られなくなりました。あまり人と交わらずに、一人遊びに熱中する子どもが増えているようです。そういう子どもたちが大人になったときに、どういう人になるのだろうかと心配になります。これと対照的なのが日頃から組織の中で人と密接に関わりをもつ体育会の学生です。そのメリットは、皆さんがおっしゃるように、つねに組織全体を考えたパフォーマンスができることではないかと思えます。

組織というと、チームスポーツばかりに目がいきますが、個人競技であっても変わりません。

私に関わってきた棒高跳びの競技でも、各選手のがんばりや意欲が、全体の士気に大きな影響を与えます。必死に跳ばない選手が一人でも現れると、ほかの選手の気持ちも緩む。「オレも気を緩めてもいいや」という雰囲気生まれてしまうわけです。

逆に、優れた選手ではなくても、がんばってベストの個人記録を出すと、周りの選

手も「オレも跳ばなきゃ」という気持ちになりません。一人の選手の行動が周りの選手たちに影響を及ぼすのがクラブなのです。

## 失敗はウィークポイントではなく アピールポイント

大山 皆さんがおっしゃるように、体育会学生の誰もがよい結果を上げられるわけではありません。望んだとおりの結果を出せる人もいれば、そうでない人もいます。それはしかたがないことです。



しかし、中には、選手として実績を出せない自分に失望し、消極的になってしまう学生もいます。

個別相談に訪れる学生の中にも、自分は部活動を一生懸命やってきたが、選手として活躍しているわけでもなく、結果も出せていない。だから何も誇れるものがない。そのように心境を吐露する学生もいます。

私は、結果よりも大事なのはプロセスだと思います。たとえ結果を出せずとも、その過程で自分なりに考え工夫し、ときには人を巻き込んで行動したというプロセスなるとアドバイスしています。

失敗や挫折は決してウィークポイントではありません。むしろ、アピールポイントになるはずですから、そういうことも学生たちに伝えてあげたいですね。

小林 今、大山さんがおっしゃったことは重要なポイントだと思います。確かに、体育会学生は一般の学生よりはるかに貴重な経験をしているにもかかわらず、その価値を自分で意識することができていない場合もしばしばあるようです。自分が経

験してきたことの貴重さに気づかせ、就職活動時に、積極的にアピールするよう促していくことは非常に大切だと思います。

山崎 企業に向けて自己アピールするうえで、武器になるのは表現力だと思います。自分はこれまでどういう行動をしてきたのか、何を積み重ねてきたのかを表現することはもちろんのこと、現状や些細なことなども、うまく言葉で説明する力が就職活動では問われます。

私の場合は、それが仕事ですから、連日、講座などを通じて、体育会学生に表現力をつけるトレーニングをしています。われわれが語る言葉の一字一句を聞き漏らすまいと、学生も必死に聞いてくれます。

特に有効なのが面接対策です。学生たちにはノックをしてドアを開けるところから取り組んでもらっています。実際の面接のような会話のやりとりを通じ、面接官がフイードバックし、コミュニケーション力を高める訓練を積み重ねています。

小林 先ほどお話ししたことと逆のパターンですが、体育会学生のレポートの中には、表現が稚拙で、改善の余地があるなど

感じるものもあります。

卑近な例で言うと、改行後の一字下げができていない。話し言葉と書き言葉の区別ができていない。正直、これではエントリーシートの段階で受け付けてもらえないのではないかと心配になるほどです。

大学卒ということであれば、教養と知識をベースに、ある程度アウトプット力が求められるわけですが、それが不十分な体育会学生も少なくありません。その意味でも、やはり表現力は重要な要素ではないかと思えます。

**大山** 表現力を身につけるためには、日頃のトレーニングが必要だと思います。

私は、就職支援講座もそのトレーニングの場として生かせると考えています。みんなの前で堂々と質問などをすれば、いい経験になるし度胸もつきます。しかし、今の学生は手を挙げたがりませんね。そうかといって質問がないわけではなく、その証拠に、講座が終わったとたん、学生たちは講師の前にずらっと一列に並んで、個人的に質問をしますから。そうした光景を目にするたびに違和感を覚えます。

**小林** 私も日々、そのような経験をして

います。授業で質問の時間を設けても、手が挙がらないにもかかわらず、授業が終わると、個別に質問に来る学生が少なくないんです。なぜみんなの前で質問をして、シェアしてくれないのかと思います。上手に質問できることは社会人としての重要な要素ですから、学生時代に大いに恥をかい、質問力を向上させたいと思います。

実際に質問をしてみると、いろいろな課題が見えてきます。何も調べていない中で質問したら、愚問になるということも実感としてわかるでしょうし、こういう視点で聞いたら、より良い質問になるということも身に染みて理解できます。これも実際に経験をし、失敗する中で学んでいくことだと思います。

### 自ら主体的に考える学生は

### セルフマネジメント能力も高い

**山崎** チーム内でクラブ運営をテーマに議論し、戦術についてコミュニケーションを深めるだけでも、表現する力は着実につくと思います。

事実、それを裏づける事例があります。

企業の人事担当者から、ここ数年、高い評価を受けている大学スポーツが「アメリカンフットボール」と「ラクロス」です。実は、この二つの競技に共通する特徴があるんです。

それは何かと言うと、選手間のミーティング時間が長いことです。競技の性質上、試合の中でも連係プレーについてつぶさに仲間と打ち合わせることが必要ですから、自然と表現力やコミュニケーション力も身につくようです。

さらにラクロスについては、歴史や伝統が浅い競技ですから、大学から用意される練習環境も組織も十分ではない場合が多く、グラウンド使用の承認が下りていないケースも珍しくありません。そのために、学生が主体的に、大学の担当者とかけ合ったり、早朝に練習をしたりと、自発的に動いていかなければなりません。そうしたことで培われる主体性も、企業に好まれているのだと思います。

**大山** 私もそうした主体性・自主性は重要だと考えています。最近では、これらの資

質に欠けている体育会学生も少なくないですね。与えられることに慣れきってしまつて、自ら積極的に動いていく学生が少なくなっているように思います。

その背景に何があるのか。体育会学生は、小さいころからその競技のトッププレイヤーである場合が多く、どうしても周囲からもてはやされる傾向があります。練習環境も、親御さんをはじめとして、スタッフが整えてくれるのが当たり前になっています。車で練習場所や試合会場までの送り迎えも当たり前。そのことに疑問を感じず、整えられた環境の中で競技を行い、大学へ進学してきた学生もいます。自分の意思でものごとを進めてきたわけではないので、一見すると非常に熱心に活動しているように見えますが、自主性が育まれていないように感じます。そうしたことが学生たちの気質に大きな影響を与えているように思います。

そのせいか、最近では、体育会ならでの活発な雰囲気やオーラをもった学生が少なくなつたように思います。昔は一つ指示を出すと、相手の意図に思いを巡らしながら、二手三手の先を呼んで動く機敏な学生

が数多くいましたが、今はあまり見受けられませんか。

本当はそうした行動や習慣が、企業にも高く評価され、社会人になってからも生きてくるのですが、引つ込み思案で、指示待ちの学生が多いのが心配なところです。

**土屋** 今おっしゃられた甘やかされた選手については、残念なことですが、野球の世界では少年野球や高校野球の場で多く見受けられます。過保護になつては、本人の肉体的な面は磨かれませんが、

**安田** 私も、学生の自主性は大切な要素だと思えます。自ら主体的に考える力をもつ学生ほど、行動も的確ですし、時間の使い方方も上手です。練習、勉強やアルバイトと、時間もきっちり使い分けている。そういうセルフマネジメントができるかできないかで、就職活動の結果も左右するように思えます。

**山崎** 同じクラブに所属していても、就職できる学生とうまくいかない学生がいますよね。能力も関係するでしょうが、個人の自己管理もその結果を分ける原因の一つだと思います。

## 就職活動はあくまでも個人活動 戸惑いを感じる学生も多い

**小林** お話をお聞きして、やはり就職活動においては、セルフマネジメントの徹底さらにはその前提となる学生の意識の高さが必要になるのではないかとあらためて感じました。

その点、体育会学生は、競技を通じて普段からセルフマネジメントや組織に貢献する明確な問題意識をもっています。その意識をうまく就職活動に向けていくことが求められるのではないのでしょうか。

もちろん、あくまでも意識の問題ですから、かなり個人的な資質に依存する部分が多いと思いますが、大学としてどう彼らをサポートすべきか、皆さんのご意見をお聞かせください。

**山崎** 実は、そこが大きな問題です。競技へのモチベーションをそのまま就職活動に結びつけることは容易ではありません。

クラブ活動の中では、先輩もいるし、監督やコーチもいる。つまり、がんばれる環境が整えられています。しかし、就職活動



は個人行動ですから、彼らは慣れていません。極端なことを言うと、彼らが生まれて初めて、直接、資本主義に触れる瞬間ですからね。戸惑いが大きいのだと思います。

**安田** 彼らにとつて、就職活動は当惑の連続だと思えます。そもそも就職活動が解禁になると、学生たちは一斉にエントリーをしなければいけません。しかし、体育会学生はその時点で、まだ心の準備ができていないんです。

一般の学生がものすごい勢いで就活態勢

に入るのを見ると、体育会学生たちは引いてしまってますね。試合もあるし、練習もしなければいけないから、自分はそこまで就職活動に熱心になれないと弱気になってしまう。それで乗り遅れてしまってますよ。そこが一番の問題です。

いったん出遅れてしまうと、挽回することとは難しいし、「今ごろそんなことをやっているのか。準備不足だぞ」と指摘されるのが苦痛だから、ますますキャリアセンターから足が遠のいてしまうという悪循環に陥ってしまいます。

**小林** 最近ではエントリーシートはウェブ上で登録するのが主流で、百社単位で登録するのも一般的になってきましたね。各企業に合わせて志望動機を書き換える必要もあるし、アスリートとしての競技との両立が難しい面もあると思います。

### 鉄は熱いうちに打て

#### 低学年のうちから将来の道を考えさせる

**土屋** やはり、その背景には準備不足があるのだと思います。

就職活動解禁の直前になって、さてどう

しようかと考え始める学生が少なくありませんが、それでは遅すぎると思います。下級生のうちから、自分の人生をどのように生きていくのか、社会に対してどのように貢献していくのか、そして、そのためにはどのような職業に就くべきなのかを考える必要があると思います。

そうした観点から、関西学院大学では「教養教育としてのライフデザイン・プログラム」という入学から卒業までの四年間を通じたキャリア支援のプログラムを設けています。

正課プログラムで世の中の職業について体系的に学び、正課外プログラムで実際の仕事に触れる。そして、エクステンションプログラムで必要な能力の強化を図るという具合に、正課・正課外・エクステンションの各プログラムが連動した取り組みです。通常、こうした取り組みはキャリア支援や、キャリア教育と名づけられることが一般的ですが、自分の人生をいかに生きるべきかという根本の問題意識を明確にするために、あえてライフデザイン・プログラムという名称にこだわりました。

このように体系立てたプログラムを構築することで、学生たちの当事者意識が高まり、学業へのモチベーションも上がります。自分が目指す仕事に就くには、どういう能力が必要なのか具体的にわかると、専門教育にも熱心に取り組むようになります。

### 教員志望のスポーツ系学生のための 就職支援プログラム

**安田** 私も、早い段階で就職を意識づけさせることが大事だと思っています。ただし、三十歳、四十歳になったときに、自分は何をやっていたのか、そうした人生の計画をイメージさせることが必要です。

特に教員を目指す学生の場合には、低学年のうちに準備をさせなければ間に合いません。教員を目指すのか、企業を志すのか、迷っている学生には、両方の準備が必要であることを理解させ、はっきりと意思表示をさせるようにしたいと考えています。

同時に、さまざまな情報提供も積極的に行っていきたいと思います。場合によっては、教員免許を取得しながら、企業に就職する道もある。実際に社会人生活を送って

から教員を目指す人も少なくないし、就職活動を経験することが、教員になってからの生徒指導においても必ず生きてきます。これほど社会や企業などを実地で学べる機会はありませんからね。そうした選択肢があることも伝えていく必要があります。

現在の小・中学校の教員の中には、自分が子どものときにクラブ活動を経験していないがために、クラブの顧問の就任を断る先生も増えているようなのですが、実は学校の現場では、クラブ指導ができる教員が求められています。

本学のスポーツ科学部では、協定校の通信教育課程を履修・修得し、最終的な試験に合格することで、卒業時に中学校教諭一種免許状(保健体育)と併せて、小学校教諭二種免許状が取得できる「小学校教諭免許取得プログラム」を五年前から展開しています。

プログラム履修者三十名のうち、初年度は十六名、昨年度が二十一名、そして今年度は十三名が小学校教員採用試験に合格しました。将来的には、保健体育だけではなく、他の科目を目指す体育会の学生を増や

したいと考えています。

**大山** 体育会学生は、上級生になると、選手として試合に出場する機会が増えるとともに、クラブの運営でも大きな責任を担うようになるので、非常に忙しくなります。なおのこと、低学年のうちから就職について考えさせることは大切ですね。

法政大学でも昨年の七月、卒業生による学生への就職支援を目的とした「法政企業人コミュニティ(法政BPC)」を発足させました。全学年を対象に、全十業界で活躍する現役社会人の卒業生から生の声を聞く、「OB・OGから業界の本音トークを聞くー!」などのイベントを開催しています。しかし、こうした自由参加のイベントには、なかなか体育会学生の参加がないのが残念なところですよ。

**小林** せっかくキャリアセンターでイベントを開催しても、それに参加してくれなければ、効果は出ません。どう彼らの意欲を引き出し、参加してくれる仕組みをつくるかが問われているのではないかと思います。そのための仕組みづくりについて皆さんのご意見をお聞かせください。

## 体育会学生限定の就職イベント きっかけを与えると要領を得るのが早い

大山 一般学生を交えずに体育会学生に限定したイベントを開催すると、参加者が増えました。法政大学では二〇〇六年度から五年間にわたって、社会人との触れ合い、働くイメージを形成するための機会として、体育会学生を対象にした就職セミナーを開きました。このときは活況でした。

毎回二十五社の人事担当者をお招きしたのですが、学生たちはみんな熱心に担当者の話に耳を傾けていましたし、積極的に質問もしていました。当初は、おもしろくない、つまらないなどと不平を言って、学生たちが帰ってしまわないかと不安でいっぱいでしたが、いい意味で裏切られました。

このイベントは今も行っていないのですが、今後は、私たちキャリアセンターのスタッフや、各部に出向いて出前セミナーを実施するなど、きめの細かい対応ができればと思っています。

とにかく彼らはポテンシャルは高いので、きっかけを与えると気づきも早い。可能性

は高いのですから、良いモチベーションを豊富に与えたいと思っています。

安田 本学のキャリアセンターでは、経験豊富な専任のキャリアアカウンセラーが常駐し、連日のように開催する「いつでも学べる就活対策講座」などを通じて、就活指導を行っています。

たまに体育会学生が来ると、あつという間に要領をつかんで帰っていきます。大山さんがおっしゃったように、通常の学生に比べてはるかに学びの速度が速いんです。

土屋 イベントへの参加率が低いのであれば、逆に正課で実施するのはどうでしょう。関西学院大学では、一・二年生を対象にした正課の全学プログラムとして、社会人をお招きし、経験を語っていただくなどのキャリアプログラムの取り組みを進めてきました。

現在では、学部独自での実施のものも加わりました。また、正課以外の支援として、例えば小林先生が所属されている経済学部では、体育会学生を対象にワークショップを開催するなど、熱心に取り組んでいます。年六回の定期開催ですから、学生たちもス

ピーチの仕方、目標の立て方などを繰り返し学べますので、就職活動の時期を迎えるころには非常に上達しています。

小林 担当しているのは大学職員ですが、その方も学生時代には準硬式野球部に所属し、全日本のメンバーにも入った体育会の出身者です。自分自身も大学スポーツを経験したことによって、人間的にも成長できた。それが社会人としての基礎になっているという強い思いがあつて、こうした活動を展開されています。

学生の側から見ても、同じ境遇を歩まれた先輩から指導を受けると、説得力が違ってしまう。その点では、皆さん方を含めて、職員の方々の力は非常に重要ではないかと改めて感じます。

山崎 学生の意欲を引き出すうえで有効なのは、クラブの同学年を集めてセミナーを行うことだと思います。

一番身近な仲間同士ですから、必ずお互いの存在を意識します。そうした仲間の中で、意欲的な学生が一人、二人と動き出すと、それまで関心がなかった学生たちの意識も高まり、就職活動にも意欲的になるん

です。

就職活動は個人的な活動だと申し上げました。クラブ組織の中で、お互いに刺激を与え合うことができれば、効果が上がると思いますね。

**安田** 山崎さんが指摘されたように、クラブは学生同士の団結力が強いわけですから、それを就職活動に利用するのも一案だと思います。

中京大学では月に一回、すべてのクラブの主宰・主務を集めて、全体会議を実施し



ています。そこで、強調しているのは、「就職活動は団体戦」ということです。

就職活動においては情報収集が重要になりますが、これも団体戦で行えば効果的です。例えば、多数の企業がブースを出すようなセミナーに参加する場合、一人で多数社のブースを回ろうとすれば、一日がかりになってしまいますが、多人数で会場を訪れ、それぞれ自分の興味のある企業を訪れ、あとで情報を交換し合えば、効果的にさまざまな業種の、しかも数多くの企業の情報を取得して、共有することが可能になります。クラブ活動や学業の関係でも、どうしても時間を割くことができない学生たちも、ある程度の段階までは対応できると思います。

一つの目標に向かってみんなで取り組むのは、体育会学生の得意分野です。こうすることによってお互いにモチベーションを上げることもできるのではないかと思っています。

**土屋** クラブの雰囲気も非常に大切です。学部教育においても、教員が熱心で雰囲気の良いゼミは就職率も高いわけです。

そういうゼミほど、上級生から下級生に効果的なアドバイスをしていたりしますから、体育会各部も参考にすべきでしょうね。

**安田** 体育会では、ことさらに先輩後輩の関係は大きいですね。

履修で悩んでいる下級生がいたら上級生が相談に乗る。同様に、就職活動でこんなに苦労しているんだということを下級生に知らせる。先輩後輩のコミュニケーションが促進されることでより良い人間関係が生まれる。それがクラブの伝統となり、就職活動をはじめとした学生生活において、良い影響を与えるのではないかと思います。

### 指導者の影響力が強い体育会 大学とクラブの連携強化が重要

**小林** 今後、グローバルな経済活動が激しさを増す中で、ますます知力、体力を兼ね備えた学生のニーズが高まってくると思っています。

その中で、体育会で四年間スポーツに打ち込み、学力も身につけた学生たちが、社会の中でさらに活躍するために、大学としてどういったことに取り組んでいくべきな

のかについて、その中長期的な方向性や課題などについてお聞かせください。

**安田** 今後は、大学とクラブ指導者の連絡、交流をさらに促進させる必要があると思います。体育の教員など大学関係者がクラブの指導者を兼ねている場合は特に問題ありませんが、現状では、社会人など学外の方が担当されているケースも少なくありません。

その場合、大学の情報がクラブに伝わりにくかったり、逆にクラブの情報が大学に入ってこなかったりといったことが起り得ます。そのあたりの意思疎通をスムーズにしていけることが大切だと感じています。

そのうえで、良い意味の役割分担が図れば、学生にとってもメリットが大きいです。特にクラブの指導者は普段から学生たちと接する時間が長いので、生活面も含めて注意して見ていただく。一方で、就職面については、積極的にキャリアセンターを訪ねるように指導していただく効果的だと思います。

**大山** キャリアセンターの一職員が「体育会学生集まれ」と声をかけても、なかなか

か効果が上がりません。

そこで私は、自分も体育会剣道部の監督を務めていますから、その人脈を生かして、すべての体育会各部の監督や主務に連絡をし、協力を得るように努めています。

**安田** 実際、指導者の影響力は大きいですよね。おそらく、指導者からキャリアセンターに行くよう促せば、学生たちもそれに従いますから。その指導力を就職や学業面でも生かせるような仕組みができればと思います。

### 体育会の良さ、スポーツのすばらしさを 大学教育に生かす試み

**山崎** 体育会は、学内組織でありながら、影響力はOB会が保持していますし、特殊な世界であることは否定しません。

これまで就職課やキャリアセンターが、体育会学生に関して中途半端な関わり合いに終始しがちだったのも、その点が大きかったと思います。

現状のように、大学の意向と監督の意向、さらにはOB会の意向が統一されることなく、バラバラに存在するようでは、学生は

混乱してしまいますから、より良い形でまとめてもらいたいものです。

大学としても、体育会のあり方に関して、確固とした方針を打ち出すべきときがきているのかもしれない。

**安田**さんがおっしゃるように、今後は、さらに大学と体育会が密接な関係性を構築したうえで、就職課やキャリアセンターが体育会学生をしっかりと捕まえて、サポートしていただきたいと思っています。

**小林** 私も、大学とクラブの指導者もつと連携してほしいと実感することがあります。実際に、体育会学生の中には大学とコーチの板挟みにあって悩んでいる場合があります。

現状では学生が自分の中ですべて処理しなければいけない状況ですが、もっと連携を円滑にすれば、より良い解決法が見つかるでしょう。

**安田** もう一つ、今後の大学スポーツの発展を考えると無視できない問題が学生の経済問題です。

本学スポーツ科学部の学生の半数が奨学金を利用しています。卒業後を考えると、

大きな負担になることに違いありません。

できれば、地元の小中学校や地域のスポーツ団体と連携し、彼らがスポーツ指導を経験しながら、報酬を得ることができるとな仕組みができないかと考えています。

**大山** 法政大学でも、スポーツをやりながら、アルバイトにいそしむ学生が増えているように思います。

それが体育会学生がキャリアセンターの就職イベントに参加できない理由の一つかもしれません。

**安田** アメリカでは、スポーツ施設の命名権を利用した資金調達など、いろいろな方法で外的資金が集められています。そうした仕組みも検討し、少しでも学生の負担を軽くしていく方法を考えていかなければなりません。

**山崎** 私は日本の大学の体育会を応援しています。いまだにあしき習慣が残っている部分があるのも事実ですが、人間として成長するうえで大事な考え方や行動様式などに対する学びも色濃く残っています。

大学にはそうした体育会の良さを検証してもらいたいし、人間形成のスタンダード

モデルに位置づけてもらえればありがたい。その際にはわれわれも、ぜひ援護射撃をさせていただきたいと考えています。

### 米国立「トータルパーソンプログラム」を日本の大学でも展開するべき

**土屋** 体育会ならではの良さやメリットを、現状の大学教育に生かすという発想があってもいいのではないのでしょうか。

私が主張したいのは、バランスのとれた健全な身の成長を図るためには、学業とともにスポーツや文化、ボランティアなどの活動を行い、それらを通じて人間的な成長を養うことが肝心だということです。特に全人格的な成長を図るうえで、スポーツは大きな意味をもっていると思います。

こうした考えは、ジョージア工科大学元体育局長のホームーライス博士が提唱された「トータルパーソンプログラム」に示されており、アメリカでは、それをきちんと体系立てて教育プログラムとして確立しています。

さらに、現在はこれを発展させた形で「ライフスキルプログラム」も打ち立てら

れ、NCAA（全米大学体育協会）加盟大学で展開されています。

日本では「文武両道」とも表現されますが、なぜ大学でスポーツをはじめとするさまざまな活動を行うのか。そのよりどころとなる考え方をぜひ再認識してもらいたいし、それを生かした教育をするべきだと考えています。

**小林** 「文武両道」を標榜しつつも、実際には「文武分業」の傾向が強まっている印象がありますが、「文」も「武」も経験し、学んだ人間が教育界で活躍できるようにしていきたいですね。文武両道という優れた考えが日本にあるのですから、それを十分に生かした教育が展開されてほしいと思います。

**本日は、体育会学生を取り巻く環境が変化している中で、あらためて体育会組織の良さ、就職における強み、さらには各大学の就職支援などについてお話を聞きしました。課題もないわけではありませんが、そのための解決策についても数多く示されたと思います。長時間にわたりありがとうございました。**